

禪學刷新の一指標

——禪の政治倫理創建のために——

市川白弦

およそ人生觀とか世界觀とか呼ばれるものは、われわれの諸觀念、生活の諸分野が、社會的歴史的生活において、生活現實の全分野との聯關において、占めるべき位置と落着くべき歸一點とを原理的に明らかにし、このやうな生活の原理的組織化によつて、新しき事態に對處し、新しき生活を創造すべき原理的精神を練成し、かくて直接にか間接にかわれわれの日常的行爲を統整指導する使命をもつ。この點においてそれは單なる知識、たとへば數學的、物理學的知識と相違する。但し日常的行爲を統整指導するといふ理論的性格においても、その積極性に度差がある。それが強度であり熟したものであるほど、哲學は單純直截な指示的表現にまで結晶する傾きをもつ。その指導性の指向する安心もしく行爲は、その性質上單純直截なものであり、單純直截なものを指示する手段は、單純直截であることが效果的だからである。諺的なもの、箴言的なものは、このやうにして形成されたのであり、従つてそれはそれを支持するその時代の民衆または個人の人生觀乃至世界觀を、含蓄的に把持してゐる。實踐的な哲學乃至教説の基本的性格を、その思想的焦點と見られる箴

言的表現において検討することは、効果的である。

われわれはここに「隨處に主と作れ^ば、立處皆眞なり。」といふ言葉をもつ。この言葉は臨濟禪の特色を示すのみならず、廣く全佛敎の歸趨するところを示すといふも過言ではない。この言葉を省察のい、とぐ、ち、としよう。

二

隨處に主となる、とはどういふことか。それは日常的生活關心の統一態として表象せられてゐる個人我を中軸とする主客分別上の關心的生活態度を、その根源に向つて超えることによつて、主體なき行爲的直觀の生活創造に純一化することである。この消息を非思量といひ、水月道場に坐して空華の萬行を修す、などといふ。しかしこのことの省察はしばらく措き、當面の吟味は「立處皆眞」といふことに限定せられ、さらにそのうちの「眞」に注目せられる。

三

「眞」といふ修辭は、「妄」に對して用ひられる場合と、「偽」に對して用ひられる場合とがある。前者はしばらく措き、後者について考へてみよう。後者については、虚偽に對する眞實と、誤謬に對する眞理とが一應區別せられる。後者の意味の眞理には、科學的眞理、哲學的眞理及び敎學的眞理が區別せられ、必ずしも一義的ではない。

ドストイェフスキーは眞理と基督との關係について、次のやうに告白してゐる。

「かりに誰かが私に向つて、基督は眞理の外にあるといふことを證明することができたとしたら、そして實際眞理が基督を拒んだとしたなら、私は眞理にくみしないで、むしろ基督のもとにとどまりたい。」(書簡)

ここにいふ眞理は、どういふ種類のものであらうか。これに關して次の言葉が想起せられる。

「偉大なる觀念に耳傾けよ。ある日この世に、この世界のまん中に、三つの十字架が立てられた。十字架の上の一人が信仰をもつて隣の者に云つた、『お前は今日わしと一緒に天國へ行くであらう』と。その日は經つた。二人ながら死んで行つたが、天國もなければ復活もなかつた。かれの言葉は實現されなかつた。聽け、その人は世界における最高の人間なのだ。生命に意義を與へたのはその人であつた。その人がなければ、この全遊星は地上における凡ゆるものと共に、單なる狂妄にすぎない。』〔惡靈〕

基督の言葉は實現されなかつた、かれの豫言は眞理ではなかつた、といふのである。ここに眞理と基督との背馳が説かれてゐる。この場合の眞理は、「天國もなければ復活もなかつた」といふ前後の關係から察せられるやうに、客觀的存在に關する眞理である。

註 「天國は汝等の内にあり」といふやうに、天國も復活も今此處に顯現すべき風光である、といふ見方については、この場合詳論の要はないであらう。「たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」といふ言葉は、眞理と法然との分裂を示すかに見えるが、しかし地獄一定と覺悟せる者にとつて、すかされるといふことはない筈である。とはいへ上人が淨土の客觀的外在を信じてゐたとすれば、さきの基督の場合と同じ分裂が見られるであらう。

四

眞理から閉め出された基督が、どうして生命に意義を與へ、全遊星を狂妄化から救ひ得たのか。何がドストイェフスキをして眞理よりも基督にくみすると告白させたのか。

それは基督の人格的魅力だと言はれるであらう。人格的魅力とは何であるか。「人生意氣に感ず。」といふ言葉がある。さういふ感激を相手に起させるやうな人間的特質であらうか。しかしこの言葉が含意するところのものは、封建的任侠的性格である。任侠的性格には叡智の光がない。基督の人格的魅力は、基督の個性において肉化せる叡智であり、叡智愛であり、内的人間の清純である。「其心淨きに隨つて佛土淨し。」(維摩經) 全遊星を汚濁から救ふものは、内的人間の淨心である。

註 眞理をすてゝ基督にくみするといふ覺悟によつて、ドストイエフスキーは安んじ得たのではなかつた。かれの苦惱は眞理と基督との分裂にあつた。ラザリンの表現をかりるならば、*God-seeker* と *God-strugler* との内的闘争がそこにあつた。そしてそれは西歐における近代的人間の苦惱でもあつた。なほ基督に對立すると考へられる眞理は、前述のものゝほかに、「大審問官」(カラマゾフの兄弟、第二卷) に表徴せられてゐる眞理があつた。(拙譯「超人の悲劇」第四章、第九章參照)

五

ドストイエフスキーの告白に對立するものとして、次の見解が擧げられる。

「ソクラテースは愛すべし。されど眞理はさらば愛すべし。」(*Amicus Socrates, sed magis amica veritas. — Amicus, Vita Aristotelis.*)

ソクラテースを敬愛すべき存在たらしめるものは、ドストイエフスキーにおける基督と同じく、内的人間の偉大さであると考へられる。そして彼にもまして愛すべき眞理として語られてゐるものは、基督を拒んだ眞理と同じ部類の、學問的な眞理と考へられる。

學を代表するものは、古代希臘においては數學であり、近世乃至近代においては自然科學であつた。自然科學と基督教との抗争は、主として基督教の自己啓蒙により、漸次解消せられた。しかるに社會科學と宗教との對立がこれに續いたのであり、これはまだ完全には解消してゐないのである。

六

自然の吝嗇に基因する生活苦から、そのことに關聯する社會苦から、そして究極的には死への不安から、人間が完全に自由でない限り、そしてこのことが自然科學的乃至社會科學的方法によつて完全に解決され得ない限り、科學的方法とは別に、主體の側における轉身の道が探求せられる根據が嚴存する。この道は單に科學的方法と別であるといふばかりでなく、かかる對象論理的態度方法の截斷において實現する。それは對象的に新しき世界觀を構想する道ではなく、何よりもまづ一切の世界觀を絶對的に否定する道である。言ひかへるならば、否定の否定を通じて、新しく世界觀を創建する道である。しかしここに問題がある。否定の否定は單なる否定ではなく、却つて肯定であると云はれる。それは有所得の道ではなく、却つて無所得の道だと云はれる。かゝる形式的な辯證論理によつて、従前の世界觀が安易に復活し定着するのが常である。従來封建的世界觀をいだいてゐたものは、依然として封建的世界觀に安住するのみではない、それに體驗的莊嚴を加へて、これを權威化するのである。硬化は二重である。

七

封建的な世界は、サン・シモンおよびコントの語法をかりるならば、神學的乃至形而上學的段階に屬し、その文化精神

は知中心であるよりも信中心であり、その時代の個人が集團に埋没してゐるやうに、知性は信仰のうちに埋没し、學が教から獨立することなく、従つて思考態度がすべて知行合一的である。

このやうな世界においては、事象の見方考へ方がすべて人中心となり、人に對する尊敬とかれの思想に對する尊敬とが區別せられることがない。かかる尊敬の仕方こそ、まさに封建的・中世紀的尊敬の特質であり、また東洋的人格に對する東洋的尊敬の仕方である。

いはゆる人格者の思想必ずしも正しいのではなく、いはゆる高德者の言行必ずしも妥當なものではない。思想なるものは、單なる心内の事柄ではなく、内外の聯關に關する事柄であり、この聯關の正しき把握と調整とは必ずしも單純容易ではなく、その故に良和良能しばしば人をあやまつからである。無所得とか無別事とかいふことは、科學的探究の必要と價值との再確認を意味すべきであり、和光同塵とか灰頭土面とかいふことは、歴史的世界に道を尋ね光を求める意味をもつべきである。

「聖胎長養」とか「入鄺垂手」とかいふ語調によつて表示せられる生活は、社會および世界が、未だ十分現實的に存在するに至つてゐない封建部落的生活圈において、最もよくその面目と使命とを發揮する。「胡言漢語、笑顏やうごに滿つ」とか、「行かん」と要すれば便ち行き、坐せんと要すれば便ち坐す」とか、「茶に會うては茶を喫し、飯に會あひまては飯を喫す」といふだけでは、まだ水村山郭的たるを免れぬ。「田を耕し飯をまるめて喫す」る底の禪は、世界史的日本創建の現段階において、どれほどの指導力をもち得ようぞ。

八

世界觀は言論および行爲に對する原理的體系的指針である。もしこの指針が正しくなかつたとすれば、かのアドルフ・ヒトラーの「輝ける直觀と豫言」のごとく、われわれの言行は的外れとなるばかりではない。隨處に主となれば、過誤愈々甚大である。立處眞とか佛土淨とかいふことが、これまで諒解せられたやうに、單に心境的ニ境涯的なものであるとすれば、未だ中世紀人間の制約を脱せざるものといふべきである。立處皆眞の眞は、科學的眞をも「錯」となすやうな眞であり、同時に科學的眞によつて「偽」とせられるやうな言行をも生みかねまじき眞である。今日の禪宗は、家庭手工業的メニファクチュア世界の歴史的社會的制約に繫縛せられ、眞に獨脱無依になつてゐない。禪は今日歴史的世界への不可缺の媒介者として科學をもたぬが故に、個々の社會事象に對する當座的評議はもち得るにせよ、原理的全般的に、眞に具體的な歴史創造の立場に立つことができず、辛うじて歴史の後からついてゆく實情にある。着衣喫飯には十二時を使ひ得てゐるかもしれぬが、世界史的には十二時に使役せられてゐるのである、正しき史眼なくして、眞に十二時を使ひ得る途はない。今日の時間は水村山郭的時間ではない、世界史的時間である。五戒十重禁の生活圏を超えて、禪の政治倫理が礎立せられなくてはならぬ。「上御一人」はもとより、アメリカニズム、ソビエティズム等々を渡さねばならぬ石橋(碧岩集五十)である。立處の眞は、どこにまで現實化すべきではないか。